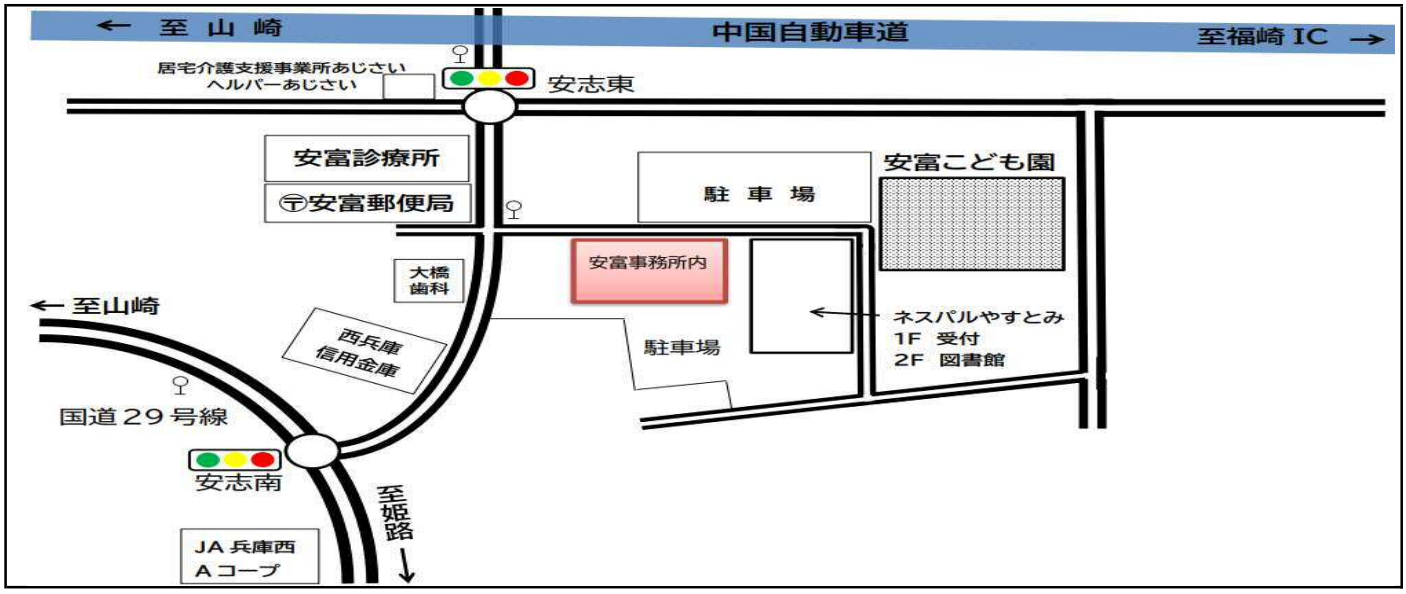
地域包括支援センター適正運営評価　基本調査票

【地域包括支援センター概要】

センター名称	姫路市安富地域包括支援センター
法人名	社会福祉法人きたはりま福祉会
所在地	〒671-2401 兵庫県姫路市安富町安志1151
電話	0790-66-4357
FAX	0790-60-3001
ホームページURL	

【センターの案内】

センターまでの交通手段	神姫バス 姫路駅～山崎の「安富事務所前」で下車、もしくは「安志」下車で徒歩６分。 姫路駅～グリーンステーション鹿ケ壺の「安志東」下車で徒歩３分。



【センターが所在する地域の特徴・特性】

姫路市の北西部に位置し、西は宍粟市に接している。中国山地の山々がつながる森林丘陵・田園地帯で、地域の中央を南北に林田川が流れている。
地元に愛着がある方が多く、多世代で居住されている家庭も多く存在する半面独居世帯も増えてきている。住民同士での見守り等が残っている。
安富全域の人口は4，664人、高齢者人口1，606人、高齢化率34．4％ （令和4年6月30日現在）であるが、中心地から離れるにつれ高齢化率が高くなっている。

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

・数年前より継続してフレイル予防に取り組んでおり、栄養、口腔ケア、運動、社会参加の大切さを伝えている。
・寺院の報恩講など、通いの場では出会えない方々に出会う機会を作り、認知症やフレイルの早期発見と予防の情報提供を行っている。

【令和5年度末の担当圏域の目指す姿】

年齢が高くなっても集いの場参加者同士で声を掛け合い支えあいながら参加が継続できている。
地域住民が意識を持ってフレイルや認知症予防及び進行予防にとりくみ、また役割を持つことでいきいきと過ごすことができる。
困りごとを地域全体で受け止めることができるよう、地域の団体や様々な機関と連携が図ることができる。
地域の課題に向けた取り組みが、地域住民主体となって起こり、誰もが住みやすい地域づくりを推進することができる。

地域包括支援センター適正運営評価　評価意見書（総評）

センター名称	姫路市安富地域包括支援センター
評価調査者名	本間　隆司・北野　香・西本　直樹

【第三者評価で確認した特徴的な取り組み、工夫点】

当該地域包括支援センターが受け持つ圏域内には、南北に広がる広大な地勢の中に約5千人の地域住民が暮らしており、地域住民にとって日常生活上で必要な社会資源を利用するに際しても、まず移動手段を確保することが重要となっている。そんな環境の中で、当該地域包括支援センターは「包括だより」を年4回、継続的に発行し、自治会を通じて全戸回覧、掲示を行うとともに各関係先へも配布して情報提供と交流・連携に繋げる取り組みをされている。中でも地域内に点在する5か所の寺院で行われる報恩講の集まりに地域住民が参集する機会を活かして、出張相談会を継続開催し、血圧測定やフレイルチェックを行いフレイル予防に取り組むとともに地域住民の関係性の構築を図り、通いの場への参加を促している活動を評価したい。

【第三者評価で確認した次のステップに向けた気づきや取り組みを期待したい点】

今後、事業計画の策定に際して、事業ごとに1年間で実現可能な具体的な目標を設定し、その目標を達成する過程として半期や4半期などの段階的な目標を作っていくことが望まれる。また、事業の評価測定には、各事業のプロセスはどうであったか、目標達成度はどうであったかを評価することが必要であり、そのためには課題を明確にしていくことが望まれる。

【評価結果に対する地域包括支援センターのコメント】

今後は各事業の課題から段階的な目標を設定し、半期や4半期で過程や目標達成状況の確認、評価を行い進捗状況が明確になるよう取り組んでいきたい。

【備考・その他】

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">評価項目・着眼点</td><td colspan="2">基本目標1：生きがいを感じながら暮らすための支援の充実</td></tr>
<tr><td colspan="2">（基本的な考え方）
人生100年時代、介護予防に努め、いつまでも自分らしく、生き生きと暮らすことが大切です。そのために、身近な地域活動への参加を増やし、継続することが必要となります。その生活スタイルを周知するとともに、地域活動の場へ通い続けることができる環境づくり、地域で役割をもって暮らすための地域づくりに取り組みます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">①</td><td>介護予防に関する認識の変革</td></tr>
<tr><td>85歳以上の高齢者に対し、「通いの場」である「いきいき百歳体操」と「認知症サロン」への参加促進を行い、フレイル予防につなげる。
市民向け講座などでフレイル予防に関する啓発・周知を進めフレイルの危険因子を持つ人等を早期に発見する取り組みを進める。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">②</td><td>高齢者が通える場があるまちづくり</td></tr>
<tr><td>介護予防への意識が高くない高齢者を通いの場に誘導するとともに、フレイル等で通いの場への参加が中断することを予防するための取り組みを充実させる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">センター記入欄</td><td>取り組みの状況</td><td colspan="2">・通いの場でフレイルチェックを実施し、生活機能や認知機能低下の危険因子の早期発見を行い、必要に応じて医療や保健センターと連携し、支援につなげられるようにしている。
・長期で休まれている方や新しくグループに参加したい方はリーダーと協力して誘い出しを行っている。
・自治会長や老人会長に出会った際や、広報誌を活用してフレイル予防の情報や通いの場の参加希望者や立ち上げ希望グループを募っている。
・寺院にて出張相談会を行い、フレイル予防の情報と合わせてフレイルチェック票を行い、通いの場への参加を促している。</td></tr>
<tr><td>現在課題と感じていること</td><td colspan="2">・地域活動参加を促しても、自分の役割や趣味などがあったり地域活動を好まれない方や、高齢になると卒業と思われる方、希望があっても移動の問題があり公民館に通うことができない場合など、参加者の増加に結び付ける難しさがある。
・通いの場において前期高齢者の地域活動参加人数が少ない。</td></tr>
<tr><td>目標達成のための今後の取り組み</td><td colspan="2">・年齢が高くなっても通いの場で参加者同士で声をかけ合い、支え合いながら参加が継続できるように促していく。
・出張相談会の開催を継続し、フレイル及び認知症の早期発見、早期介入ができるように地域住民団体と連携を強化する。
・早期から介護予防の取り組みが行えるよう、通いの場以外の地域活動の場にも出向き、フレイル予防について継続して情報提供を行っていく。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価調査者記入欄</td><td>評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点</td><td colspan="2">5か所の寺院で出張相談会を開催されており、1か所30～40人に啓発を行うと共に状態確認をしている。また血圧測定やフレイルチェックを実施している。公民館など通える場を大事に地域内15箇所の「生き生き教室」へ年2回訪問しフレイル予防に取り組んできた。いきいき百歳体操では約70人のフレイルチェックを実施している（うち13名は認知症サロンで実施のため重複計上）。その他、認知症サロンでは40～50人のフレイルチェックを実施して、今後更にチェックを継続し住民の健康維持を目指している。フレイルチェックの項目のチェックによっては、関係資料を渡したり、声かけしている。</td></tr>
<tr><td>次のステップに向けた気づきや期待したい点</td><td colspan="2">移動の問題はあると思うが、これまでに蓄積してきた社会資源との交流実績や関係性構築の成果を生かして継続的に意識変革の働き掛けに努めて欲しい。地域の事業所、店舗にも顔を出されており、包括だよりは行き渡っていると思われるが、地域の方とコミュニケーションをとり相談しながら事業に取り組んで行かれることを期待したい。</td></tr>
</table>

評価項目・着眼点		基本目標2：困りごとを地域全体で受け止める体制の構築
		（基本的な考え方） 日常生活圏域単位に市民に身近な場所への地域包括支援センターの設置を継続し、地域の高齢者、その介護者の生活スタイルに対応できる相談体制の強化を行います。困りごとを抱える高齢者やその家族への支援を行う中で、地域共生社会の実現に向けて、他との連携を進めていきます。
	①	地域包括支援センターの運営
		地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割を持っていることを地域で認識されるようになる。
	②	地域包括支援センターの機能強化
		地域包括支援センターの専門性を活かした相談機能を強化する。
	③	世代や分野を超えた地域のつながりの構築
		地域共生社会の実現に向け他分野との連携を強化する。
センター記入欄	取り組みの状況	・活動内容や役割については、包括だよりにて自治会を通じ全戸回覧、掲示を行うとともに、老人会長や民生委員、様々な機関、商店などを訪問し配布と共に案内している。 ・相談については、随時若しくは毎朝のミーテングで共有すると共に方針についても話し合っている。必要に応じ他機関へも相談し繋いでいる。また専門知識の向上を目指し積極的に研修に参加し、参加後は包括内で情報共有も行っている。 ・地域の民生委員・児童委員協議会定例会に関係機関とともに出席し連携を図っている。生活支援体制整備事業については、地域の関係機関や自治会と情報交換を行っているところである。
	現在課題と感じていること	・周知については地域の役員の方々や高齢者及びその家族、関係機関にとどまっており、若い世代への周知がまだ進んでいない。 ・地域包括支援センター職員の資質向上が求められる。各種研修の参加は相談や支援に活用できることが目的であることを踏まえ、活かすための努力が必要である。 ・支えあいが残っている地域であるが、支え手と支えられ側とがはっきりと分かれてきており、支え手が疲弊・減少してきている。地域支えあい会議などを紹介し啓発を続けているが、公的な支援を求める声が増えつつあり、啓発が進まない。
	目標達成のための今後の取り組み	・感染症予防の観点も配慮しつつ、訪問の受け入れがある若い世代の地域活動や趣味活動の場へ赴き、広報活動を行う。 ・困難事例や虐待に関する研修、相談業務に活用できる研修に参加すると共に情報収集を行い、活用しやすいよう情報整理を行う。 ・両連合自治会長を中心とした生活支援体制検討会議の開催に向けて、準基幹地域包括支援センターや関係機関と共に考えていく。地域支えあい会議については会議を重ねていくことで理解に繋がると思われるため、開催機会を増やせるよう啓発を続ける。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	高齢者人口が増えている中で、健康で過ごしてもらうための取り組みであるフレイル予防の啓発に力を入れておられる。また、包括だよりの配布先が多く、細やかな気配りを感じる。その先々でのちょっとした会話が今後につながると思われる。掲示と配布、老人会長、民生委員・児童委員の例会まで参加されているのは素晴らしい。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	地域性を考えた上での広い範囲への呼びかけを行っているが、日頃接触の少ない多くの若い世代も参加する「あじさい祭り」や地元のお祭りの活用を期待したい。併せて、依頼のあった相談業務だけでなく、日頃聞けない相談ごと、困りごとの啓発の機会とされることが望ましい。

評価項目・着眼点		基本目標3：地域で暮らし続けるための支援の充実
		虚弱・軽度要介護者の重度化防止、自立支援のために、地域活動への参加など多様なサービスの活用を図ります。
	①	多様なサービスの活用
		地域の通いの場や多様な主体で展開される介護予防生活支援サービス、在宅医療・介護の連携体制及び認知症高齢者等への支援に係るサービス(地域支援事業)を効果的に活用して、虚弱・軽度要介護高齢者の重度化予防・自立支援を図る。そのために、地域包括支援センターが担う取り組みや事業としては、地域ケア会議推進事業、生活支援体制整備事業、通いの場の充実、認知症の人への支援などがあげられる。
センター記入欄	**取り組みの状況**	・高齢者教室や地域の通いの場などで地域資源やフレイル予防・認知症予防について啓発している。またフレイルチェック票を通いの場での活用だけでなく、寺院での出張相談会の際にも活用し、フレイルや認知症の早期発見に繋げている。 ・年に4回発行されている広報紙配布を活用し自治会、老人会、民生委員、地域の金融機関や商店など情報交換を行っている。特に民生委員においては、民生委員・児童委員協議会定例会の出席や懇談会などを活用し連携を図っている。 ・町内の診療所の医師と連携・連絡を取れるよう、居宅介護支援事業所とともに連絡ツールを活用している。
	現在課題と感じていること	・広報紙や地域活動、高齢者教室、出張相談会等を活用し、いきいき百歳体操や認知症サロンの立ち上げや参加を促しているが、結果として立ち上げまで繋がらず、また新しい参加者もなかなか増えていない。 ・新型コロナウイルス感染症流行以降、専門職間の話し合いは行えているものの生活支援体制検討会議の開催まで至っていない。
	目標達成のための今後の取り組み	・自治会、老人会、民生委員など地域関係団体と連携を図り、地域の課題について一緒に考える機会を増やしていく。 ・地域の通いの場や地域リハビリテーション活動、介護予防・生活支援サービス事業、認知症初期集中支援事業など様々な制度を活用できるよう、地域住民団体や地域内の事業所に対して情報提供と提案をする。
評価調査者記入欄	**評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点**	公的な事業所以外の高齢者教室や公民館講座などで、介護保険を利用する方法などの情報提供が行なわれている。その他、いきいき百歳体操や認知症サロンの参加や継続ができるよう後方支援をするとともに、シャキシャキ体操や健口体操もDVDを紹介し活用を広めている。認知症サロンのメンバー、ケママネジャーからの情報提供により、入りやすいサロンへのつなぎや医療関係者と事業者と地域包括支援センターをつなぐ情報ツール作成の工夫もうかがえた。地域の医師と連携連絡ツールとして、専用のメール用紙を作成し、町内で活用している。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	いきいき百歳体操や認知症サロンの立ち上げが進まないことについて、老人会や民生委員・児童委員との連携、連絡を活かし、具体的な課題をあげて、場所、人などを絞って、できることから取り組んでいかれることを期待したい。また、認知症サロンに限らず、自発的な茶話会の集まりへの呼び掛けにも期待したい。

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="7">評価項目・着眼点</td><td colspan="2">基本目標4：認知症とともに暮らす地域の実現</td></tr>
<tr><td colspan="2">認知症は誰もがなりうるものであり、認知症になっても、住み慣れた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる共生社会を目指します。また、認知症の発症を遅らせることができる可能性が示唆されていることを踏まえ、予防（認知症になるのを遅らせる。認知症になっても進行を緩やかにする）に関する取り組みを推進します。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">①</td><td>認知症にやさしい地域づくり</td></tr>
<tr><td>認知症サポーターが地域で活躍できる機会の充実を図る。認知症の人本人が、自身の希望や必要としていること等を本人同士で語り合う場を設置する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">②</td><td>認知症になるのを遅らせるための取り組み</td></tr>
<tr><td>高齢者が身近に通える場等の拡充。通いの場を活用し、認知機能低下がある人や、認知症の人に対して、早期発見・早期対応が行えるよう、医療機関とも連携した支援体制の整備。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③</td><td>認知症になっても地域で暮らし続けるための取り組み</td></tr>
<tr><td>認知症の類型や進行段階、生活環境に応じた適時・適切な医療・介護に提供が出来るようになる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">センター記入欄</td><td>取り組みの状況</td><td colspan="2">・安富中学校2学年を対象に認知症サポーター養成講座の継続開催と地域の通いの場で認知症に関する勉強会を行い、SOSネットワークなど認知症に関する情報提供を行っている。また広報紙も活用し認知症に関する情報提供を行っている。
・認知症サロンで年に1回フレイルチェック票と認知症チェックシートの実施、また寺院による出張相談会の際にフレイルチェック票を実施することで、フレイルや認知症の早期発見・早期対応に繋げている。
・認知症相談で認知症ケアパスを活用し、症状に応じた対応を心掛けている。</td></tr>
<tr><td>現在課題と感じていること</td><td colspan="2">・高齢者は地域活動で認知症啓発に取り組んでいるが、多世代については安富中学校の認知症サポーター養成講座以外は啓発に繋がっていない。
・認知症サポーターも認知症サロン以外での活用がない。
・認知症サロン登録制度変更後に認知症サロン数が減っており、登録についての話を勧めているが、参加者の高齢化、後継者不足、提出書類も多いため、結果として登録まで至っていない。
・中央保健センター安富分室と随時相談できる体制は出来ているが、認知症初期集中支援事業を活用するまでは至っていない。</td></tr>
<tr><td>目標達成のための今後の取り組み</td><td colspan="2">・通いの場や集いの場などの地域活動への参加が認知症予防に繋がる事を地域住民に啓発する。
・認知症サポーター養成講座開催時に、受講生に認知症サポーターとしての活動意思の確認及びどのような活動をしたいかを確認し、希望者と共に活動機会を考えていく。
・地域内で認知症サポーター養成講座開催や認知症に関する勉強会を実施する事で認知症への理解を高めていき、地域での支えあいや見守り体制の構築に繋げる。
・認知症相談に対して適切な事業の活用や制度に繋げていく。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価調査者記入欄</td><td>評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点</td><td colspan="2">中学校での認知症サポーター養成講座を毎年1回継続的に開催している。地域の高齢者の集いの場で、ケアパスの話や認知症に対する制度、地域での行方不明者のSOSネットワークについても話をしている。認知症サロンの支援をする中でフレイルチェックと合わせて認知症チェックシートの実施や一人ひとりの話を聴いている。家族の話を聞くうえで、認知症ガイドブックも利用しながら情報提供を行っている。</td></tr>
<tr><td>次のステップに向けた気づきや期待したい点</td><td colspan="2">若い世代への啓発がなかなか進まず、認知症サロンでは参加者の高齢化、後継者の問題がうかがえるが、地域の活動に参加することが認知症予防になることを伝え、活動を継続していくことを期待したい。また、事業所への啓発や老人会、民生委員・児童委員の集まりでの勉強会の開催などを通じて日頃の人間関係を構築しながら繋がりの輪を広げていってほしい。</td></tr>
</table>